氏　　名	：	楊陽（モンゴル名 蒙古貞夫）
専攻分野の名称	：	博士（学術）
学 位 記 番 号	：	博甲第３５８号
学位授与年月日	：	令和３年３月１６日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	モンゴル民族の伝統芸能ホーリンウリゲルの変容研究
論文審査委員	：	（主査）　教授　石井　正己 （副査）　教授　寺井　正憲　　教授　黒石　陽子 教授　野中　陽一　　教授　佐藤　正光

学 位 論 文 要 旨

本研究は「変容」という視点からモンゴル民族に特有の伝統芸能ホーリンウリゲルの淵源、形成、成立、伝播、繁栄、衰退、現状について検討し、この芸能の淵源を確認し、発展した経緯、現在の上演形式に固定化されて成立した地域と時間、伝播した路線とその後の影響力、繁栄した時期の実態、衰退化している主要な原因と現在の状況を捉え考察を行った。

第1章では、モンゴル国・ロシア・ドイツ・日本・イギリス・ハンガリー・アメリカ・フランス・韓国９ヶ国の研究を国外と設けて整理・検討を行ったが、政治・経済・地域文化など様々な条件が限られて新たな研究成果があまりに生み出せず、停滞気味である実態を把握できた。また、中国を国内の研究と設けて考察を行ったが、ホーリンウリゲルの本拠地に近いなど有利の条件があるため、次第に新たな研究成果を提供して主客転倒した研究状況を明確にした。

第2章では、これまでにモンゴル語・日本語・漢語で書かれたホーリンウリゲルの概念を整理・分析した上で、辞書等を調べることでより厳密な概念を提供した。また、ホーリンウリゲルを構成する三要素である伴奏楽器のホール・説唱脚本のウリゲル・吟遊詩人のホールチについては、未公開の日本語資料『大清楽譜』および現地調査の一次資料を活かして、ホールの形状は早くても同治（1862～1874）と咸豊（1851～1861）、さらに道光（1821～1850）と嘉慶（1796～1820）の年間、遅くても光緒6年（1880）には定まり、説唱脚本は時代の変遷を経て、英雄叙事詩を語ることから歴史小説を語るようになり、チンギス・ハーンの宮廷楽士の中でアラガソンというホールチが活躍していた史実が明らかになった。

第3章では、ホーリンウリゲルの起源に関する5つの起源説を考察し、12世紀から13世紀にホーリンウリゲルの淵源の一端であるホールチが存在したことを確認することができた。また、ホーリンウリゲルの発展過程を分析した所、この芸能の形成に英雄叙事詩だけでなく、マングスインウリゲルの形成やヤバガンウリゲルの登場やベンスンウリゲルの拡散などの影響があり、それらがホーリンウリゲルの成立を促進させたことが分かった。

第4章では、ホーリンウリゲルが清朝期のジョソト盟・トウメット左旗、即ちモンゴルジン

旗で固定化された要因について考察を行ったが、1669年にモンゴルジン旗でチベット仏教寺院の「瑞應寺」が建立されたことよって、寺院文学と寺院音楽が発展する機会を得たので、ホーリンウリゲルの成立を促進したことを明らかにした。また、ホーリンウリゲルの伝播については、エンケテグスとダンスンニマの生涯を明らかにする資料を補充し、歴史小説『興唐五伝』の作者はエンケテグスという有名なホールチであったことを明らかにした。さらに、ダンスンニマを元祖ホールチと考えるのではなく、エンケテグスこそホーリンウリゲルの中興の祖である史実を論証したほか、ホーリンウリゲルの流派は、ダンスンニマがチュイバンとバインボルゴを弟子に取って、ホーリンウリゲルの説唱方法を教えたので、東部モンゴル地区にホーリンウリゲルの流派が形成された状況が明らかになった。

第5章では、ホーリンウリゲルの繁栄と衰退について考察したが、内モンゴル自治区を主とする各モンゴル族地域ではウリゲルインゲル（蒙古説書館）の建設が始まり、旧社会では地位が低かったホールチたちは新しい時代に生まれ変わって、実演すると給料が貰えるようになり、同時に視聴者の数が急増してきた事実を明らかにした一方、モンゴル劇が生まれたことに伴って、ホールチの主導権が奪われ、さらにグローバル社会における現代的な情報媒介の発展によって社会の環境が急激に変化する中でモンゴル語の言語環境が悪化したので、ホーリンウリゲルには次第に衰退の傾向が見られるようになった原因を明らかにした。

第6章では、ホーリンウリゲルの現状と変容状況について考察し、国家伝承人の下でホーリンウリゲルを学んでいる弟子のモンゴル語の基礎が不足しているため、ホーリンウリゲルの詞牌と曲牌が順調に勉学できていない現状を明らかにした。そして、ホーリンウリゲルを未来に継承するため、モンゴル族の児童と生徒に自民族の文化への自覚を促し、学校教育の中で継承者と視聴者を育成していく新たな制度を取り込んだことが明らかになった。最後に、ホーリンウリゲルを持続的に発展させるために、後継者育成の重要性、教材開発の必要性、説唱脚本のデータベース化の緊急性について提案した。